

Seeing is believing —アジアの英語教育事情—



村上美保子

海外の英語教育視察は、1998年に当時兵庫教育大学大学院での指導教官であった高島英幸先生（現東京外国語大学名誉教授）の研究室で韓国を訪問したのが始まりである。その後毎年視察の機会をいただき、20年間で20の国・地域を訪れた。教育省や教育委員会等の行政側の人々から英語教育改革や言語政策について話を伺い、小学校、中学校、高等学校の英語の授業を見せていただくと、聞いた話とはかけ離れている場合もあり、現場に足を運んで自分の目で見る事が大切であることを学んだ。

アジア地域で視察した韓国、フィリピン、中国（瀋陽、北京、香港）、台湾、タイ、シンガポール、ベトナムなどの多くで感じたのは、児童・生徒の英語学習に対する動機づけの度合いが日本とは違うことであった。タイ教育省では、「タイと日本は英語教育の成果が上がっていないという共通の課題を抱える同志である」と歓迎のスピーチを受けたが、成果が上がらない原因の一つは動機づけの弱さだろう。

その国・地域の英語教育の成果を感じ取るには、街歩きが一番だと思う。例えば、バンコクやハノイの街中で耳にする英語は土産物屋などで商売に必要な語くらいで、食べ物の屋台では写真を指差して注文するように仕向けられ、英語で質問しても返ってくるのは笑顔ばかりである。瀋陽ではホテルにおいてさえ、「Bring us four forks.」という英語が理解されず絵を描いて伝えた。英語より漢字の筆談の方が通じたのは衝撃だった。ソウルや台北の街角でも、英語で会話することは簡単ではない。一方、香港やシンガポールでは、どこでも問題なく英語が通じ不自由は感じない。

英語教育が成功していると感じられるアジアの国・地域では、英語は個人および国家の社会的・経済的成

功と直結している。多言語国家のシンガポールでは、英語はLingua franca（共通語）として機能し、国家経済の中核を成す観光・サービス業への就職の必須条件であるため、児童・生徒の英語学習への動機づけは非常に高い。同様に、英語を公用語とするフィリピンでは、就学率の低さ（1999年視察当時、義務教育で60%強）もあり、児童・生徒の授業での熱心な学習ぶりには気迫さえ感じられた。「7人兄弟で高校に来ているのは私だけです。」「勉強ができて幸せです。」「英語ができるようになっていい仕事をしたい。」と流暢な英語で答えが返ってきたことは鮮明に記憶に残る。香港は、1997年のイギリスから中国への返還後も、指導言語が英語の中学校・高等学校を存続させている。大学教育は英語で行われ、香港の高等教育機関の数は限られるため、大学進学は英語圏の国々をはじめから想定した教育を実施している。これらの国・地域では、教室外で英語使用者として機能する英語力をつけることが必要で、学習者もそれを認識している。

一方、日本をはじめとする多くのアジア諸国・地域では、英語は外国語として、つまり、学習対象として学ばれており、学校外での英語使用は限られ、児童・生徒は英語の必要性を感じにくい状況にある。それでも中国や韓国では、生徒たちは厳しい進学・就職競争を勝ち抜くための有効な手段の一つとして英語を捉え、やはり英語学習に対する動機づけは日本より格段に強い。日本では児童・生徒を英語学習に向かわせるには教師の力が必要である。英語によってどのように経験値が上がるのかを自らの経験から熱く語り、世界で通用する英語力をつける手立てを教室内で提供することが教師の使命であると考えている。

（むらかみ みほこ・茨城キリスト教大学教授）

2020年度新制度入試への ロードマップ



佐藤雄太郎

新制度入試に向けた動きがだいぶ本格化してきました。英語について言えば、2019年1月早々に「英語成績提供システムの概要」が文部科学省より示され、試験によっては2019年度から実施できるよう準備が進められています。

新制度入試は、大学受験までのロードマップという点で「今のまま」というわけにはいきません。その点を中心に解説いたします。

■新制度入試の変更点～共通テスト中心に

2020年度からの新制度入試の変更点として、共通テストに話題を絞ると、国語と数学に記述式が導入され、英語には「民間団体による資格・検定試験（以下、外部試験）」の成績が活用されます。しかし、センター試験から教科目数（6教科30科目）に変更なく、また、（国語と数学を含め）マーク式問題も継続されます。外部試験も、大学入試に限った特別な問題が課されるわけではありません。

ただし、共通テストの試行調査を見る限り、2017年、18年と続いて「過程や手順を考えさせる問題」「学校の授業や活動の場面を想定した問題」が出題されています。これからは、「結果（答え）」だけではなく、学校の授業（例えば、理科の実験や数学の解き方、課題発表の手順など）を中心に、「過程や手順」について尋ねる問題が多くなりそうです。過程や手順が「どうであったのか」を含めた学習が必要と言えそうです。

■新制度入試の決め手は英語

新制度入試において、英語はいろいろと大きく変わります。ポイントに分けて解説します。

(1) 受験の仕方と日程の変更

現行入試においては、推薦・AO入試を除き、高3生になってからの翌年1月のセンター試験までに学習を終える受験生が最も多いのではないのでしょうか。新制度入試では、そうはいきません。というのも、共通テストで活用される外部試験の成績は「高3生の4月から12月の間に受検したもの」という制約があるからです。つまり、高3生の4月までには、一通り、外部試験を受検する準備を調べておく必要があることになります。

このように言うと、外部試験は12月まで受検できるわけですから、「それまでに間に合わせれば」とお考えの方もいるかもしれません。しかし、大学受験は「英語」だけではありません。また、外部試験以外にも、“共通テスト”“私大入試”“国公立2次試験”それぞれの対策も必要でしょう。他教科も含めて十分な学習時間を確保しながら、学習計画を立てていく必要があります。

外部試験の受検準備を高2までにするには別の理由もあります。外部試験の受検機会は、1回限りではありませんが、会場や日程に制約があります。2018年12月に文部科学省が公表した月別受検者の予想数を見る限り、6月に40万人が受検する見込みですが、他の月で受検者が殺到した場合、思い通りの時期や会場で受検ができないこともあります。さらに学校行事等で日程が合わないなどの想定も必要となるため、高3になっての「走り

ながらの対策」はできるだけ避けたいのです。

(2) 試験の種類

(1)で少し触れましたが、新制度入試では英語の試験種類が増えます。

- ①外部試験（成績提供）、
- ②共通テストで課される2種類の英語（筆記[リーディング]とリスニング）、
- ③私大入試、
- ④国公立2次試験が種類としてあります。例え

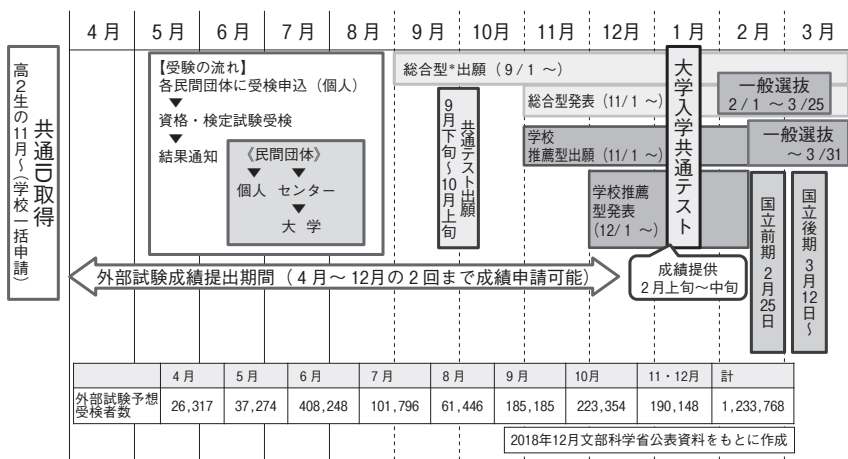
ば、国公立大を受験する場合、外部試験の成績＋共通テスト（2種類）＋2次試験となります。一方、私大は、多くが独自の問題のみを課します。しかし、早稲田大学や上智大学をはじめ、2020年度から共通テストや外部試験の成績を必要とする大学もあります。そのため、「全く不要になる」とは言い切れませんので、国公立大同様に、試験の準備をしておく必要があります。

外部試験は《英語が正しく運用できているかどうか》を測る試験です。一方、大学入試は《志望する大学が求める学力像にマッチするかどうか》が重視される試験ですから、4技能がバランスよく出題されるとは限りません。そのため、試験それぞれの対策が必要となるのです。

以上の点から、英語は、国公立大にせよ私大にせよ、試験種類が増えることから、効率良い学習が求められます。総じて、「読む」「聞く」「書く」「話す」について学習しなければなりませんので、英語については、普段からの学習の積み重ねが必要になると言えるでしょう。

(3) 志望大学を早い段階から決めておく

現在、多くの国公立大学では、外部試験の成績活用について、①出願要件か②共通テストの点数に加点のどちらかを条件として発表しています。



*総合型選抜：いままでのAO入試に相当

①も②も、CEFRを基準としており、①の場合、詳細を発表する多くの大学では「A2」以上としています。もしも、①とする大学を志望しても「A2」以上に達していない場合は、「その大学を受験すらできない」ことになってしまいます。なかには、高3生から準備しても間に合わない条件を課す大学もあります。生徒は、自分が受験する大学が「どのような条件を課すのか」という点にも、早い段階から目を配っておく必要があります。

■まとめにかえて

以上、共通テストや外部試験を中心に、新制度入試の解説を簡単にしてきました。制度面では大きく変わらないようでも、受験までのスケジュールや試験種類という点では、現在の入試から大きく変わります。そのため、受験までの日程を意識しながらの日々の積み重ねが大学受験に大きく左右すると言えそうです。学校の授業と家庭学習の時間を上手く利用し、外部試験や志望大学に関する正しい情報を得ながら、計画的な学習を心掛けるようご指導いただければと思います。

（さとう ゆうたろう・代々木ゼミナール教育総合研究所長）

共通テスト試行調査を 分析して



安武内ひろし

大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）第2回が2018年11月に実施されました。本番も同様に行われるかは不明ですが、本稿では、この試行調査を分析してわかった点をつづっていきます。

1 英語共通テスト全体を見て気づく点

センター試験と比較しての最大の相違点は「配点」です。従来、筆記〔リーディング〕（以下、単に「筆記」）200点＋リスニング50点だったのが、筆記100点、リスニング100点になりました。筆記の配点が半減、リスニングの配点が倍増し、その結果、筆記（書きことば）とリスニング（話しことば）の比率が4：1から対等になります。そもそも今回の改革は「英語4技能の力を均等に伸ばす」というのが主目的ですから当然とも言えます。

解答時間に変更はありません。筆記が80分でリスニングが30分のままです。これではバランスが悪いので、今後改善の余地がありそうです。その他、図・表・絵などヴィジュアル素材の挿入が異常に多いのも今回の特徴です。

2 リスニングテストの新しい点

一番目立つ点は、**問題読み上げの回数**です。センター試験ではすべて2回読みでしたが、共通テストでは2回読みと1回読みの問題とが混在しています。不思議なことに、問題が短く単純な前半部分（第1問～第3問）の問題は全部2回読まれ、長く複雑でややこしい内容の後半部分（第4問～第6問）は1回だけ読まれています。逆のほ

うがよいのではないかと思います。

すき間の無音時間の短縮も目立ちます。すき間とは、1回目の読みと2回目の読みの間のすき間、そして問いと問いの間のすき間のことです。センター試験ではおよそ10～11秒あったすき間が、共通テストでは5～8秒に縮んでいます。この5～8秒のすき間時間は TOEFL® のレベルですから、受験生に切迫感を与えるでしょう。

さらに**読み上げスピード**も、センター試験に比べて速くなっています。その結果 natural speed に近づき、「英語の音変化」（音の連結・脱落・吞み込み・短縮・同化など）が生じて、日本人が予想する音とはかなり異なる発音が多くなります。

異なるバックグラウンドの話者による英語読み上げも新しい点です。一つは(1)米音（主に米国とカナダ）に加えて英音（主に英国と豪州）であり、もう一つは(2)非ネイティブ英語です。(1)については、入試のリスニングでは大半の大学が米音での読み上げで、東大のように必ず米音と英音を出す大学は少数でしたが、今後は米音に加えて英音への対策も必須になるでしょう。(2)の非ネイティブ英語は、英語圏以外の人々の喋る英語を聴き取る問題です。果たしてそれが大学入試で必要なのかどうかは意見が分かれるでしょうが、今回は第4問で「4つの学生寮を選ぶにあたって、それらの寮に住む各国出身の寮生から話を聞く」という設定になっていました。

センター試験の第2問型の問題も消えました。会話が途中まで進んで、さて相手は次に何と言いますか？という形式です。これは、実際の英会話

場面では必須の技能である「会話相手の次の言葉を予測する力」を見るよい形式だったので、復活してほしいと思います。

3 筆記テストの新しい点

センター試験にあったいろいろなものがなくなっていることに気づきます。まず設問指示の日本語がなくなり、すべて英語に置き換わりました。

次に、旧第1問の「発音・アクセント」、旧第2問の「文法・語法・語彙」「語句整序完成」、旧第3問の「短い会話文」「不要文削除」「長い会話討論文」がごっそりなくなりました。これは、英語4技能の下位に位置する分野（発音・アクセント・綴り・文法・構文など）は4技能のそれぞれの試験でチェックされるので筆記テストの中に無理して盛り込む必要はない、という考えだと思われる、それは妥当な判断だとは思いますが、その結果、全体を見たときにバラエティーに欠けた単調な構成になってしまっている感が否めません。

共通テスト（筆記）の構成は以下の通りです。

[1] グラフ・チャート読み取り（旧第4問A・B）が、新第1問AとB、新第2問AとB、新第3問です。これは、図、表、グラフ、Eメール、パンフレット、ポスター、挿絵など、何らかのヴィジュアル素材を見ながら問いに答える形式です。共通テストのそれぞれの問題では、ヴィジュアル素材が必ず使われているのが特徴ですが、それが果たして効果的に作用しているのかと問われると、やや疑問ではあります。受験生の側では、解答するのに必要ない部分は思い切って読み飛ばすという判断が必要になってくるでしょう。

[2] 物語文読解（旧第5問）は新第3問Bです。新第5問の「伝記」もこの枠に入るでしょう。

[3] 論説文読解（旧第6問）は新第2問のB、新第4問、新第6問AとBになっています。

それぞれの問題形式が重複しているために、もっと整理すれば3分の2くらいの問題量でも十分、正確な学力は測定されうるだろうと思われる

す。時間も80分ではなく60分くらいに切り詰めることが可能だと思います。浮いた20分をリスニング試験に足せば筆記60分とリスニング50分でバランスもよくなりますし、リスニングの後半の問題を2回読みしても時間が確保できます。

筆記でさらに気づく目新しい傾向としては、「**事実（a fact）ではなくて意見（an opinion）を選びなさい**」という指示のある問題（第2問B）、それから第4問・第5問のように「**2つ以上の正解があるかもしれません**（You may choose more than one option.）」という設定の問題です。これらに対する対策はぜひ必要だと思われます。

筆記テストの総単語数は（設問の英語部分を除けば）センター試験とほぼ同じであり、英文の難易度も変わりません。

4 まとめ

分析しての結論をまとめると、**リスニング対策が以前よりもはるかに重要になってきた**ということに尽きます。これがセンター試験の英語との最大のちがいです。

明らかに難化しているので、今まで以上に本腰を入れてリスニング指導をする必要があります。「筆記と同等の配点だ」というアナウンス効果も大きなインパクトを与えそうです。以下の対策が必要になるでしょう。

- (1) 読み上げが1回だけの問題にも即応できる力をつける（ただし私は今も大半が1回読み）。
- (2) 様々な人が発音する英語（特にイギリス発音と非ネイティブ発音）の音に慣れさせる。
- (3) 速いスピードの英語（natural speed）を聞き取る訓練を重ねる。生徒教材用に意図的にゆっくりと読み上げられた音声では「英語の音変化ルール」を習得させることはできません。
- (4) 絵や図表（特に講義ノート）を見ながら英語を聞く訓練を繰り返す。

（あぶない ひろし・英語教育評論家、佐鳴予備校・@will 講師）

新テスト——先生はどう対応しますか？

「多量で豊かなインプット」と「適切なアウトプット」

溝畑保之



TOEFL も、昔は、文法問題もある知識中心のテストでした。しかし、「高得点だが、話せない」ことが問題となり、英語使用場面を綿密に調査し、「何ができるか」を4技能で測るようになりました。TOEFL のような最新のテスト理論を用いた外部試験は「何ができるか」を視座にした「絶対評価」のテストです。形式慣れの一時的得点上昇はありますが、半年程度の確かな学習を経ないと、実力を反映する得点上昇はありません。また、特定の外部試験の形式に絞った対策は、学習動機維持の点からも、効果がありません。

大学入学共通テストも、TOEFL と同じく、CEFR も考慮し、英語使用場面で「何ができるか」を測る要素を増しています。リスニングと同じ配点の筆記〔リーディング〕では、発音・アクセント、語句整序がなくなり、ディベート、プレゼンなどの場面が取り入れられ、事実と意見を区別するなどの汎用的スキルを試すようになっていきます。

これからは、4技能志向の学習指導要領と入試の乖離が少なくなります。本校では、「多量で豊かなインプット」と「適切なアウトプット」を方針に、Can-do を作成し、バックワードで計画をして、教科書での4技能型の授業を行っています。音読を大切に、「要約」や「意見表明」活動を行います。さらに、題材を、ジグソー法、紙芝居プレゼン、ディベートに発展させ、年2回程度の自作のスピーキングテストを実施します。英

語以外の言語にも応用でき、生涯の宝物になるような学習を勧めたいものです。

(みぞはた やすゆき・常翔学園中学校・高等学校教諭)

「気付き」と「継続」を促す音読の指導

小林大介



大学入学共通テストで筆記とリスニングの割合が均等になり、また試行調査に1回読みの設問が含まれたことは、リスニング指導がこれまで以上に重要になったことを意味しています。リスニング指導と一口に言ってもねらいや方法は多種多様ですが、その中でも高校の初期段階で指導したいのが、英語そのものを聴き取る力（以下、「聴き取る力」）です。

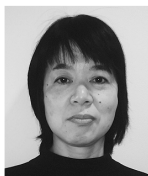
「聴き取る力」を育むには音読は欠かせません。その有用性は、多くの先生方が授業に導入されていることから明らかです。ただし、「聴き取る力」を高めるためには授業内の音読だけでは十分とは言えません。そこで授業外の音読に結びつく指導が必要になります。しかし「ひたすら音読してみよう」という“根性論”は昨今の高校生には響きにくいように思います。そこで私が取り組んでいるのが英語の音声への「気付き」と「継続」を促す指導です。

まず、授業の一部を利用して、英語音声学を高校生向けに噛み砕いた教材を用いて日本語と英語の音声の違いに気付かせます。扱う項目は、ストレス、リズム、抑揚、音変化、母音などです。そして「継続」を促すために、定期的に生徒に自身の音読を各自のスマートフォンに録音させる、教師自身のボロボロに使い込んだ音読教材を見せる

などの仕掛けを施します。英語の音の特徴に気付かせ、音読を継続したことで生徒が成長を実感できるところまでを目標に指導をしています。

(こばやし だいすけ・静岡市立高等学校教諭)

教科の壁を越えて



加藤仁恵

大学入試センターによる「新テスト」に関する資料を読み返してみた。実施の背景として「社会とのつながりを意識しながら学習の質を高め、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指すことがより一層重要になる」「知識・技能と思考力・判断力・表現力をその双方ともに、バランスよく、確実にばぐくむことが必要」とある。

授業をする上で日頃私が大切にしているのは、英語以外の教科に関わる部分を「英語を通じて」意識させることである。それはおそらく、入試が変わっても変わらないと確信している。ただ単に、それをより強く訴えていこうというだけである。「知識・技能」は従来の英語の授業形態を生かして「英語そのもの（語彙・文法・表現など）」を指導する。その上で「思考力・判断力・表現力」は他教科にも関わること、さらに「社会とのつながり」ということから日常生活の中で起きている出来事、自分を取り巻く環境などを意識的に観察し、それをトピックとして英語の中に取り込んでいく。このことは何も目新しいことではない。戦争に関するトピックが教材として取り上げられていればその背景について世界史の分野をひきこんでみる。動物の生態に関することであれば生物の授業や素材と結び付けてみる。こうした取り組みは今に始まったものではないだろうが、それをより「強く」意識して指導していこう、ということである。教科の壁を越えて、また時には「教科」という意識を超えることが新テストへの「対策」に自動的になるのかもしれない。

(かとう ひとえ・渋谷教育学園幕張中学校・高等学校教諭)

日々の授業と新テストの関連を整理



青山良輔

私の勤務する高校は、国際科の専門高校であり、生徒の外国語コミュニケーション志向や、海外での生活、異文化に対する志向が強いことが特徴です。授業内でも、ディスカッションやディベートなど、実際に英語を使う活動が好まれており、高校3年生の英語力はCEFR-JでB1.1からB2.2に大部分の分布をみると感じます。現行の入試制度においても、いわゆる「受験英語」にフォーカスした授業実践は生徒から敬遠されている節があり、教員側はそれへの対応を迫られることは稀です。よって、本校において、入試内容から逆算をして授業内容を考えることは不要です。

しかし、授業での学習内容や言語活動が、入試で問われている技能とどのように結びついているかを整理することは必須と感じます。例えば、本校では、1) プレゼンテーションを聞き、ノートテイキングを行い情報を整理する、2) ディスカッションにおいて、事実(統計や事例)をサポートとして自らの意見を述べる、という活動を行っています。2018年度試行調査を分析すると、1)の活動はリスニング第5問や第6問、2)はリーディング第2問Bで問われている技能に関わりがあることがわかりました。このように関連を整理することで、自信を持って日々の授業に臨めるのではないのでしょうか。試行調査では、発音・アクセントや語法・文法を問う選択問題が姿を消し、学習指導要領との関連がより強く反映されていました。これをいわゆる「受験英語」からの脱却と捉えれば、現場が「コミュニケーション型授業実践」と「現実問題としての入試対応」の板挟みから抜け出すチャンスであるといえそうです。

(あおやま りょうすけ・神奈川県立横浜国際高等学校教諭)

スピーキングとライティングを 統合した授業内活動と Self Correction 能力の育成

遠藤修史



■ はじめに

2020年度の入試制度の変更に伴い、和文英訳ではなく自由記述型のライティング能力の育成が急務となった今、新しい指導法を模索する動きが活発になっている。本稿では、生徒のライティング力を伸ばすのに効果のあった前任校での授業実践を紹介する。使用した教科書は大修館書店発行の *Departure English Expression I Revised* で、平成30年度の4月より1学年の英語表現の授業を1年間実践した。授業はオールイングリッシュ・チューデントセンター型のアクティブラーニング授業で、生徒の発信力をバランス良く高められるような授業実践に努めた。

■ 授業実践内容

各レッスンを1時間ワンセットで実践する。

1時間目 ※授業のゴールは「文法項目を含んだ自分の英文が言える書ける」

1.ウォームアップ活動として、ペアでスモールトーク→全体でシェア。 2.宿題で取り組ませておいた文法項目の演習問題の解答をグループごとに出す※話し合いのみ日本語使用可→クラス全体で答えの確認。 3.文法項目を含んだ自分の英文を各自ノートに書く→グループ内でシェア→全体でシェア。

2時間目 ※授業のゴールは「各レッスンの指定トピックに関する英文パラグラフが書ける言える」

1.そのレッスンのトピックについての理解を深めるためのリスニングないしリーディング活動(レッスンごとに入れ替え)に個別に取り組む→

ペアで答えの確認→全体で確認。 2.パラグラフライティングのための準備活動(英文の空所補充)に個別で取り組む→全体でシェア。 3.パラグラフライティング。手順は次の通り: 個別にパラグラフライティング(7分程度)→ペアでシェア(1回目)。聞き手と話し手の役割を交代しながら互いに書いたものを共有する→アップデート(1回目)。個別に間違いの訂正や、ペアの発表から得たヒントを元に英文の加筆をする→別のペアでシェア(2回目)→アップデート(2回目)→さらに別のペアでシェア(3回目)→全体でシェア。

1月中旬には教科書2巡目に入った。2巡目の授業内容は以下の通りである。

各レッスン1時間で終了し、手順は1巡目の2時間目と共通。各授業のゴールは以下の3つ。

- ・1巡目に書いた英文パラグラフの間違いを訂正・加筆し、より長く優れたパラグラフを書く
- ・1巡目よりも fluency を高めて発表する
- ・発表の後、聞き手は発表内容に関する5W1Hクエスチョンを即興で作って質問し、話し手はそれに適切に答える

■ Integrated な活動と Self Correction 能力の育成

これまでのライティング指導では教員が赤ペン添削をするのが一般的であり、私自身も20年以上そうした指導をしてきた。しかし新しい授業を実践するようになってから、実は添削指導を全くしていない。「添削指導をしなくて生徒の accuracy

をどうやって高めるのか」という疑問を持たれる方が多いだろう。

この疑問に対する答えは見出しにある Self Correction 能力と密接に関わってくる。上記教科書 1 巡目の各レッスン 2 時間目では、メインの活動であるペアワークで、生徒はまず自分の英文パラグラフを書く。その後、最初のペアと相互に聞く・話すのペアワークをする。直後のアップデイトイングタイムで、自分の英文に修正を加えていくのだが、こうした指導を実践したことがない先生方には「生徒が自分の間違いに自分で気づいて、しかも修正ができる」という具体的なイメージが湧きにくいかもしれない。その点について、本校の生徒の声を紹介すると以下の通りである。

- ・「読み直しをすると時制等の細かいミスに気がつく」
- ・「音読をするから間違いに気づきやすいと思う」
- ・「読むときは相手に伝えるという意識が強く、フレーズリーディングをするので、自分の英語におかしな所があると話していて違和感がある」
- ・「ペアの内容を聞くことで自分のミスに気づくし、自分の英語をもっと上手い表現に替えられる」等々

生徒は修正を加えながら英文パラグラフを完成させていくこのプロセスを 2 時間に 1 回の割合で経験している。さらに発表時の fluency に関しても同じ英文をペアを替えて複数回実践するので、accuracy と同時に高めることが出来るのである。「教員の添削の無いこの状態で全ての生徒が間違いの無い英文を書けるのか」という疑問があらたに出るかもしれないが、それ故に、教科書の 2 巡目が存在するのだ。前述の通り 2 巡目は 1 月中旬よりスタートした。従って生徒達はおよそ 9 ヶ月前の能力で書いた自分の英文を見直したことになる。この時の生徒の反応を想像できるだろうか。主な声は以下の通りである。

- ・「うわー、なんだこれ。私、これだけしか書け

なかったんだ」

- ・「間違いだらけで笑っちゃう」
- ・「正直、自分がこんなに成長してるとってなかった」
- ・「英語のスピーキングとライティング能力が信じられないほど高くなっている」等々

ほとんどの生徒が各自の能力の伸長を驚きの感情と共に実感しているようだった。教科書 2 巡目のペアワークや全体でのシェアでは各発表後に Q&A を課したので、聞き手側の生徒も前にも増してアクティブリスナーになり、ただ聞くだけではなく相づちを入れたり、聞き取れなかったことの聞き返しをする姿が目立つようになった。2 巡目の全体でのシェアはクラス全員の前に立っての発表であったが、多くの生徒が臆せずに自信を持って発表が出来るようになっていた。

■ 授業実践を通し見えてきたこと

私自身にとってもこれまでは教員による添削指導が常識であったが、この 1 年を経て今では正反対の意見を持っている。教員添削の全てを否定しているわけではないが、この指導の短所がはっきりとわかったからだ。添削指導では基本的に生徒は間違いを教えてもらっているだけである。また、先生が直して完璧になった文をさらに優れた文に替えようとはしない。このプロセスでは Self Correction 能力の育成は到底望めないのである。

新しい指導の成果は GTEC 等の外部検定試験の結果にも顕著に表れた。英語 4 技能のうち、スピーキングとライティングの平均スコアが他の 2 技能を大きく上回り、1 年間の伸び率も他の 2 技能を圧倒する結果となった。

スピーキングとライティングは能動的活動である。故に、この 2 技能の能力を向上させるには、間違いを含みながらアウトプットを繰り返し、訂正を重ねるプロセスが不可欠である。今後も試行錯誤を重ね、能力育成を図っていきたい。

(えんどう ひさし・山梨県立甲府第一高等学校教諭)

これからのスピーキング指導



田中知聡

地域社会や国際社会において外国語で意見を伝え合う力がますます必要になる中、学習指導要領改訂、大学入試改革等を受け、高校の教育現場も大きな改革の時期を迎えています。

次期学習指導要領では、「話すこと」を「やり取り」と「発表」の2領域に分け、話す内容を事前に準備して行う「発表」だけでなく、「即興性」を意識した活動にも焦点があてられるようになりました。自然な場面や状況を設定した活動を通して、生徒が英語を使って情報や考えを伝え合う力を育成することがさらに重視されるようになります。本稿では、「話すこと」のうち、「やり取り」に焦点をあて、その活動例と評価例を紹介します。

まず、生徒に身に付けさせたい力をどれくらいに設定するか決め、3年間を見通した教育課程、学年、期間の中で、何ができるようにさせたいか考え、評価方法、授業内容、活動を決めます。

スピーキング活動に取り組むことができるようにするには、即興でやり取りを行う活動を普段の授業から取り入れておく必要があります。

(1) 写真を即興で描写する活動

すぐに取り入れられるのが、教科書などの写真を使って自然なやり取りをする活動です。

T: What do you see in this picture? Where is the location?

S₁: It's at the beach. There are many people.

T: What are the people doing?

S₂: Some people are swimming.

教師と生徒でやり取りをします。写真から情報

を読み取り、順序良く説明する力を身に付けさせることが目的です。必要な語彙を確認していくことは、後の活動の支援にもなります。

(2) 生徒自身の経験や日常生活について問う活動

生徒に、生徒自身のことに目を向けさせることはとても大切です。音楽についてのテキストを扱う際に使える発問例を見てみましょう。

Q1. Do you like listening to music?

Q2. Have you ever been to a concert?

ペアで、すぐにでも行える簡単な問いを選びます。自分のよさや得意なこと、興味のあることを認識させるとともに、他者に対して興味をもたせ、互いを尊重する態度を育みます。リラックスして話すことができる雰囲気作りは、これからの授業に欠かすことができません。

(3) 会話を続ける力をつけさせる活動

相手の発話に対する反応の仕方を練習します。

T: Responses are also important. Let's practice together. "Wow!" "Really?" "I didn't know that." "That's wonderful." "How was it?" "Please tell me more."

このように反応の仕方を練習すると、教室の雰囲気明るくなり、生徒の会話が弾みます。

(4) 質問する力をつけさせる活動

話題を広げたり深めたりするための質問を生徒自身に考えさせる活動も効果的です。

T: Today's topic is music. Think about questions you want to ask about this topic.

トピックについての質問をペアで考えさせた後、全体でシェアをし、板書をしていきます。

What kind of music do you like? / Who is your favorite singer? / When do you listen to music? / Why is music important to you? など、生徒が他者に尋ねたいと思う様々な質問が出てきます。

“In our real-life communication, it is important to listen to what people say and ask questions to get more information. Try to continue talking for more than one minute.” と指示をすると、1分では足りず、2分くらい会話を続けられるようになっていきます。矢継ぎ早に質問をさせるのではなく、自然な会話の流れを意識して丁寧にやり取りをするよう導くことが大切です。

(5) 日常的な話題から社会問題へとつなげる活動

スピーキング活動をする場合、例えば次のような目標、評価、活動を考えることができます。

<目標> Students will be able to:

1. Describe what people are doing;
2. Tell their opinions;
3. Give two reasons to support their opinions.

<評価> 上記の目標それぞれについて、(A)十分に達成できた、(B)ほぼ達成できた、(C)伸ばす必要がある、の3段階で評価する。

Look at the picture. Describe what people are doing.

Q. Do you think we should volunteer more?
Why? / Why not?

海に浮かぶプラスチックごみを集めている人の写真を使用します。同じトピックでも、少し難易度を下げて、Q. Do you think volunteering is good? と尋ねたり、難易度を上げて次のような目標、評価、活動をすることができます。

<目標> Students will be able to:

1. Tell their opinion, agree or disagree;
2. Give two reasons to support their opinions;
3. Add explanations to each reason.

<評価> 同様に3段階で評価する。

Do you agree or disagree?

We should stop using plastic products in our daily lives.

生徒に最終的にこのような活動ができるようにするために教師ができる支援を見ていきましょう。次のように教師が問いかけ、その問いについて教師と生徒で会話をしたり、1～2分間ペアでやり取りをさせたりしながら、思考力、判断力、表現力を育成する授業を展開します。

T: Look at this article. It says we might have eaten plastics for our breakfast. Can you believe this?

英字新聞の記事を見せて環境問題に着目させます。

T: Do you often drink from plastic bottles?

日常や学校生活と結び付け、生徒同士でやり取りさせます。

T: What kind of plastic products do we use in our daily lives? Name as many as possible.

身の周りにあふれるプラスチック製品を挙げさせ、社会の状況に目を向けさせます。

T: Look at those pictures. What do you see?

T: What can people do to protect the environment?

写真、地図、グラフなどを使い、社会問題について考えさせます。

そして最後に、自分の考えを伝え合う活動に戻ってくると、生徒は生き生きと自分の考えを表現し始めます。異なる視点から思考させ、様々な意見や具体例を参考に自分で判断させることで、生徒は自分が伝えたいメッセージを持つことができるからです。

生徒には、様々なスピーキング活動での体験を通して、英語でメッセージを表現することを楽しみ、さらに表現を広げるために学び、社会で必要とされるコミュニケーション能力を身に付けていってほしいと思います。

(たなか ちさと・山梨県立甲府城西高等学校教諭)

新テストで変わる？ これからの文法指導



萩野俊哉

1 はじめに

文法の学習は英語力の基礎を作り上げる上で不可欠です。したがって、学校で文法を教えることは必要です。しかし、大切なのは文法の「教え方」です。私は、新しい学習指導要領の実施といわゆる「新テスト」(大学入学共通テスト)の導入によって、これからの英文法指導は次のように改善されることを改めて強く期待しています。

2 コミュニケーションのための英文法指導へ

無味乾燥な文法解説や無目的な文法ドリルはもはや終わりを告げ、「何のための文法指導か」が問われる時代へと私たちは入りました。「新テスト」のプレテストを見ても、語句整序などの文法や語法の力を単独で直接測るような問題は姿を消しました。一方、たとえば本文中の仮定法過去完了形の意味を理解していないと解けない問題が出題されるなど、読解の中で文法力が試されるようになりました。リスニングも同様です。

読解やリスニングは、書き手や話し手の伝えたいことを読み取りあるいは聞き取るというコミュニケーション活動です。また、今までどちらかというと軽視されてきたスピーキングやライティングも、今後「新テスト」や日頃の授業の中で重視されるでしょう。つまり、今後は「コミュニケーションのための英文法」指導が求められることになるのです。そして、その指導法の核となるキーワードは以下の3つです。

(1) meaningfulness

前述のように、文法には必ずその文法が使われ

る「意味」があります。その点をきちんと生徒に理解させ、習熟させることが必要です。

たとえば、受動態が使われる「意味」には、大きく以下の3つがあるということを理解させる必要があります。

① 誰がやったか(行為者)がわからない、あるいは言うことができないか明確にせずばかしたい

- ・ All the jewelry *was stolen* from the store.
- ・ More than 50 ordinary citizens *were killed* during the attacks.

② 情報の自然な流れを作り出し、前の文とのつながりをよりスムーズにしたい

下の例においては、よく知っている John について何が起きたかを伝えたいわけですので、「旧情報→新情報」という自然な流れに沿った形の a. の文(受動態)が適切です。

I happened to see David on the street. He said to me,

- a. "Did you hear that John *was bitten* by a dog yesterday?"
- b. "?Did you hear that a dog bit John yesterday?"

③ 主語を「軽く」したい

次の c. の文は、主語が長く、いわば「頭でっかち(top-heavy)」の文です。英語はこのような形を嫌います。d. のように受動態を用いることで、そのような形の使用を避けることができます。

- c. The words said by the teacher during his class yesterday influenced me.
- d. I *was influenced* by the words said by the

teacher during his class yesterday.

(2) usefulness

生徒は英語で自分の言いたいことが文法を活用してきちんと相手に伝わったときに文法は「役に立つ」と実感します。この実感を生徒に味わせてやる指導が求められます。

まず、ひとつ例を示します。to 不定詞と形式主語 it を使ったコミュニケーション活動です。

次の事柄はあなたにとって、〈easy, difficult, impossible, boring, interesting〉の内のいずれでしょうか。例にならって、〈It is/was/will be ~ for me (not) to ...〉の形で書きなさい。その後、ペアで会話してみましょう。

(例) to ask for a date: It is easy for me to ask for a date.

- a. to play the guitar:
- b. to get up early:
- c. to speak English:
- d. to be an astronaut:
- e. to study for three hours at home:
- f. to (自分で考えよう!):

《活動の手順》

1 指示文の中の単語の発音と意味を確認する。
その後、(例)の説明, a. ~ e. のそれぞれの表現の意味を確認し、音読して口慣らしをする。

2 それぞれについて、まず各自自分で答える。

3 ペアを組んで、次の例にならって会話する。

A : Is it easy for you to play the guitar?

B : No, it isn't. It is impossible for me to play the guitar. But it is easy for me to get up early. How about you?

4 数組のペアに発表してもらう。その際、教師が適宜質問を加え、さらにコミュニケーションをふくらませることもできる。また、生徒と教師がペアになって発表してもおもしろいだろう。

第2に、発想を転換して、従来の「文法解説か

ら言語活動へ」という流れから、それとは逆の「言語活動から文法解説へ」という流れを考えてみても良いと思います。いわゆる task-based な考え方に基づいて、活動 (task) の目標を達成するための手段は生徒に自由に選択させ、つまり、使用する文法は生徒にその時点で身につけているものを活用させ、活動終了後に振り返りの中で「言いたいけれども言えなかったこと」や「このように言えたらさらに正確に、あるいは効果的、効率的に伝えられたこと」を整理させ、その中で新出文法事項の導入・解説を行うのです。このように行うことで、生徒自身が「文法は役に立つ」ことを実感し、まさに「コミュニケーションのための英文法」を自覚することになります。

第3に、ここでは紙幅の関係で詳しく述べられませんが、CEFR (欧州言語共通参照枠) の中で記述されている“Can-do” (言語で何ができるか) の概念と文法を組み合わせるさまざまな言語活動を行うことで、文法の有用性を体感することができるでしょう。

(3) plentifulness

たくさん (plenty) 練習させる、ということです。ときには小学生の『漢字ドリル』や『計算ドリル』のような単純な繰り返し練習も文法の習熟には必要なことだと思います。

また、教材をデザインし直すなど工夫して、らせん階段をぐるぐる回るように、生徒を大切なことに何度も触れさせつつ学習を補強していくスパイラルな学習を促すことも重要です。たとえば、不定詞、分詞、関係詞などを「後置修飾」という概念でデザインし直してスパイラルで教えるというやり方は有効な方法です。

3 おわりに

本稿では、これからの英文法指導を考える上で重要と思われることを3つのキーワードを軸にして説明しました。共に頑張りましょう。

(はぎの しゅんや・新潟県立加茂高等学校長)

「主体的に学ぶ力」を育む eポートフォリオ

尾木義久



■ 「ティーチング」から「ラーニング」へ

先行きが不透明な時代だ。生産年齢人口の減少、産業構造の大転換、AIの進化。目まぐるしいスピードで社会が劇的に変化する。この時代に求められるのが「生涯を通じ主体的に学ぶ力」だ。この力を育むため高等学校学習指導要領が改訂される。教師の「ティーチング」から生徒が主体となって学ぶ「ラーニング」への転換が始まる。

■ アクティブ・ラーニング「主体的・対話的で深い学び」

【主体的な学び】とは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか」である。例として「学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりすること」が示される。これがJAPANE-Portfolio（以下、JeP）の活用が注目される理由だ。

■ 主体的な学びと JeP

生徒がスマホ、タブレット等を使って学びの記録をJePに蓄積し、「自己の学びを振り返り、次の学びにつなげていく」。ただJePを導入しただけで生徒が主体的に学ぶわけではない。「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組む」ためのメソッドが必要だ。特に生徒自らが目標を打ち立てられるようになることが一番

重要だ。

■ 探究と JeP

【深い学び】とは、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか」である。「探究」も今回の改訂の目玉である。

「探究」では、生徒は年間を通じてあるいは3年間を通じて学びを展開する。文献に触れたり、フィールドワークで大学・企業・街の人々から学んだり、アンケート調査をしたり、実験をしたり様々な方法で、課題を発見し解決するための学びを行い、その成果を論文にまとめる等する。その学びの記録を電子化して蓄積すれば、極めて効率的にまとめができる。教師もいちいちノートを提出させなくても取組を把握できる。

■ JeP の今後

JePは2019年4月より一般社団法人に引き継がれる。調査書の電子化も行われ、ともに進化を遂げていく。中教審の部会でもポートフォリオ活用が挙げられており、JePの重要性が高まる。生徒達にはJePで質の高い振り返りをしながら、真に豊かな人生を切り開いてもらいたいと心から願っている。

（おぎ よしひさ・関西学院大学学長特命）

「高校生のための学びの基礎診断」とは何か



斎藤剛史

文部科学省が高大接続改革のために導入する新テストは2種類がある。一つは、周知のように大学入試センター試験に代わって2020年度から(2021年1月実施)導入される「大学入学共通テスト」(共通テスト)。もう一つは「高校生のための学びの基礎診断」(基礎診断)だが、2019年度から実施されるにもかかわらず、高校現場でもほとんど認知が進んでいないのが実情だ。いったい、「基礎診断」とはどんなものなのだろうか。

■ 二転三転した基礎診断の性格

もともと基礎診断は、高校無償化を導入した旧民主党政権時代に、全国学力テストの高校版である「高等学校学習到達度テスト(仮称)」として構想された。その狙いは、高校教育の多様化が進む中で、高校教育ですべての生徒が身に付けるべき資質・能力の「コア」となる学力を保証しようというものだった。

その後、自民党の政権復帰、安倍政権による教育再生実行会議の設置により、学習到達度テストの構想は、大学入試改革の一環として議論されるようになる。同実行会議の第4次提言(2013年10月)は、共通テストに当たる「達成度テスト(発展レベル)」とともに、「達成度テスト(基礎レベル)」の導入を提言。発展レベルは一般入試、基礎レベルは推薦・AO入試などでの活用が想定されていた。

ところが、提言の具体化を検討した文科省の高大接続システム改革会議は、「達成度テスト(基礎レベル)」の名称を「高等学校基礎学力テスト

(仮称)」に変更して、希望する高校のみの受検という方針を打ち出した。そして、入試選抜などに関わる「テスト」ではなく、基礎学力の定着を図る授業改善のPDCAサイクルを確立するツールであることを明確にするため、最終的に「高校生のための学びのための基礎診断」が正式名称となり、文科省は2017年7月に実施方針を策定した。

■ 民間試験を活用して4技能を測定

基礎診断は、国語、数学、英語の3教科で、文科省が認定した民間事業者による複数の試験を活用して実施する。記述式など思考力を測定する問題を導入すること、英語では「話す」を含む4技能を測定することなどが認定基準となっている。基礎診断を実施するかも含めて、どの民間試験を利用するか、実施時期、実施回数、対象学年などは、高校などの判断に任される。また文科省は、平均点、順位などの情報は公開しない。

文科省は、2018年12月に基礎診断として活用する民間試験の認定状況を公開した。初年度分としては、国・数・英の3教科セットがベネッセコーポレーションなど3団体8試験、教科単独の英語はケンブリッジ大学英語検定機構のケンブリッジ英語検定、ベネッセコーポレーションのGTEC、Z会ソリューションの英語CAN-DOテストなど5団体7試験が認定されている。

英語については、大学入試とともに、基礎学力診断でも4技能が測定されることになり、高校の英語教育にも大きな影響を与えそうだ。

(さいとう たけふみ・教育ジャーナリスト)

新学習指導要領で 英語教育はこう変わる

酒井英樹



新学習指導要領により英語教育は小学校から高等学校まで大きく変わる。小学校の大きな変更点は早期化と教科化である。3年生から年間35単位時間の外国語活動が、5年生からは教科化された外国語が年間70単位時間実施される。3～6年生で週1時間程度外国語教育が増えたことになる。

中学校における変更点は、授業における英語使用である。英語に触れたりコミュニケーションを行ったりする機会を増やすために、「授業は英語で行うことを基本とする」ことが明記された。また、小学校での外国語教育の充実に伴い、中学校における指導内容も大きく変わる。言語材料の点から言うと、英語の大文字・小文字や基本的な符号などは小学校で扱われることになる。一方で、高等学校で扱われていた感嘆文、仮定法、現在完了進行形が指導項目に加えられている。

高等学校の変更点は科目再編である。中学校とのブリッジの役割を果たしていた「コミュニケーション英語基礎」はなくなり、必修科目「英語コミュニケーションⅠ」の中で中学校における学習を踏まえた指導をすることとされた。また、「英語表現」や「英会話」がなくなり、高度な言語活動（スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、まとまりのある文章を書くことなど）を通して発信力を育成することに重点が置かれた「論理・表現」が設置された。

これらの制度的な変更は、外国語によるコミュニケーション能力をより一層推進するために行われたものである。今回の改訂によって教師の指導観も変わる必要がある。4つのポイントを示す。

ポイント① 目標となる資質・能力の整理

今回どの教科等においても、育成すべき資質・能力が、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という3点から整理された。外国語によってコミュニケーションを図る資質・能力も例外ではなく3つの要素から成るものとして記述されている。生徒が持つべき資質・能力を理解した上で指導にあたるのが大切である。

例えば、知識及び技能の点からは、文法などの知識を有しているだけでは不十分であり、実際のコミュニケーションにおいて活用できるような技能を身に付けさせることが求められている。文法規則を理解したり、語彙の知識を増やしたりすれば十分であると考えている教員は、生徒が本当にその知識を使えるのか確認する必要がある。

また、思考力、判断力、表現力等の点からは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、適確に理解したり、適切に表現したりする力の育成も必要である。例えば、サマリー・ライティング力を上げると、正しい英語で短くまとめることだけを指導していないだろうか。どの程度短くしたら良いのか、どのような情報を選ぶのか、どのように表現するのかということは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等によって変わる。生徒に、目的や場面、状況に応じて、情報の整理や選択の方法、表現方法を変えたり、工夫したりさせることが必要である。

また、主体的、自律的にコミュニケーションを図り、外国語によるコミュニケーション能力を伸

ばそうとする学びに向かう態度、人間性等も指導しなくてはならない。自らの学びを振り返り、学習の度合いを見極める自己調整力も重要になる。

ポイント② 領域別の目標の設定

今回の改訂では、小学校から高等学校まで一貫してコミュニケーション能力の育成を図ることが可能となるように、外国語を使って何ができるようになるのかという観点から、技能別の目標が詳細に設定された。学習指導要領では、資質・能力に関する柱の一つである「知識及び技能」と区別するために、領域という用語が用いられている。

領域別の目標は、小学校から高等学校まで段階的なものとなるように設定されている。ざっくり言うと、小学校の外国語活動・外国語ではCEFR A1程度まで、中学校ではA1後半からA2程度まで、高等学校ではA2程度からB1程度までの英語力を育成することが目標とされている。高等学校では生徒の英語力は学校により異なる。生徒の英語力を、学校段階別の領域別の目標やCEFRなどを参照して把握し、適切な指導を行い、段階的かつ着実に育成することが求められる。

ポイント③ 学習過程への言及

学習指導要領は目標と内容を示すものであり、指導方法については学校や教員が創意工夫するものであったが、今回の改定ではどのように指導すべきなのかという学習過程に踏み込んで規定した学習指導要領となっている点に注意したい。

外国語教育においては、「言語活動を通して」コミュニケーション能力の育成を図ることとされた。言語活動とは、「実際に英語を使用して自分自身の考えを伝え合うなど」の活動のことである。授業の中で、実際にコミュニケーションを行う言語活動がどの程度行われているだろうか。言語活動の活用と適切な支援を行うことが求められている。

高等学校では、4技能（5領域）に加えて、4

技能を結び付けた統合的な言語活動を行うように示されているのも特徴的である。技能統合という点では小学校から話すこと〔やり取り〕として質問をしたり質問に答えたりする活動が行われることになる。中学校では、読んだり聞いたことに基づいて話したり書いたりするという言語活動が例として示されている。このような学びを踏まえて、高等学校では言語活動の高度化を図り、技能統合の言語活動を行うこととされている。

ポイント④ 見方・考え方の重視

すべての教科等において、見方・考え方を働かせて資質・能力を育成することとされた。外国語教育においても、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成することとされている。

見方とは何をどのように捉えるのかという視点のことである。外国語によるコミュニケーションの見方は「外国語や文化」を「社会や世界、他者との関わりに着目して」捉えることとされている。例えば、probably, perhaps, possiblyの意味の違いを捉えるだけでは、外国語に注目しているとは言えるが、社会や世界、他者との関わりに着目しているとは言えない。Possibly your son will pass the exam. と言えば、相手を怒らせ、関係を悪くするかもしれないという他者との関わりなどの側面に着目して捉える必要がある。

考え方とはどのように思考を働かせたり判断したりしたら良いかという、思考・判断・表現を価値づけるものである。外国語によるコミュニケーションにおける考え方とは、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて情報を整理しながら考えなどを形成、再構築すること」とされている。例えば、ただ単に意見文を書かせるだけでなく、目的や場面、状況等などの条件を常に意識しながら、自分の思考・判断・表現という認知活動を調整できることが必要である。

（さかい ひでき・信州大学教授）

新学習指導要領の見取り図

編集部

○全体のスケジュール

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
小学校	移行措置 教科書採択	☆新指導要領施行		
中学校	移行措置	移行措置 教科書採択	☆新指導要領施行	
高等学校			教科書採択	☆新指導要領施行
新テスト 関連	「学びの基礎診断」 開始	「大学入学共通テスト」開始		

○新学習指導要領下の英語教科・科目一覧

校種	教科名	科目名 [標準単位時間数]	目標 CEFR	語数
小学校	中学年	外国語活動 *活動型 [年間35単位時間 (週1コマ程度)]		600～700語程度
	高学年	外国語(英語) *教科型 [年間70単位時間 (週2コマ程度)]	A1	
中学校		外国語(英語) [年間140単位時間 (週4コマ程度)]	A1～A2	1,600～1,800語程度 (現行: 1,200語程度)
高等学校	外国語 (英語)	英語コミュニケーションⅠ [3] ★ 論理・表現Ⅰ [2]	A2	1,800～2,500語程度 (現行: 1,800語程度)
		英語コミュニケーションⅡ [4] 英語コミュニケーションⅢ [4] 論理・表現Ⅱ [2] 論理・表現Ⅲ [2]	B1	
	英語 (専門課程)	総合英語Ⅰ ★ ディベート・ディスカッションⅠ ★ エッセイライティングⅠ	A2～B1	
		総合英語Ⅱ・Ⅲ ディベート・ディスカッションⅡ エッセイライティングⅡ	B1～B2	

★は必修科目 ・「英語コミュニケーションⅠ」は2単位まで減単可
・専門教科の科目の標準単位数の決定は学校設置者による

○言語材料の新旧比較（高校は「英語コミュニケーションⅠ」の「文法事項」）

	現行	新
小学校		㍿ 文 a 単文 b 肯定、否定の平叙文 c 肯定、否定の命令文 d 疑問文のうち、be 動詞で始まるものや助動詞（can, do など）で始まるもの、疑問詞（who, what, when, where, why, how）で始まるもの e 代名詞のうち、I, you, he, she などの基本的なものを含むもの f 動名詞や過去形のうち、活用頻度の高い基本的なものを含むもの ㍿ 文構造 a [主語＋動詞] b [主語＋動詞＋補語] のうち、主語＋be 動詞＋名詞／代名詞／形容詞 c [主語＋動詞＋目的語] のうち、主語＋動詞＋名詞／代名詞
中学校	㍿ 文 a 単文、重文及び複文 b 肯定及び否定の平叙文 c 肯定及び否定の命令文 d 疑問文のうち、動詞で始まるもの、助動詞（can, do, may など）で始まるもの、or を含むもの及び疑問詞（how, what, when, where, which, who, whose, why）で始まるもの ㍿ 文構造 a [主語＋動詞] b [主語＋動詞＋補語] のうち、(a)主語＋be 動詞＋名詞／代名詞／形容詞、(b)主語＋be 動詞以外の動詞＋名詞／形容詞 c [主語＋動詞＋目的語] のうち、(a)主語＋動詞＋名詞／代名詞／動名詞／to 不定詞／how（など）to 不定詞／that で始まる節、(b)主語＋動詞＋what などで始まる節 d [主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語] のうち、(a)主語＋動詞＋間接目的語＋名詞／代名詞、(b)主語＋動詞＋間接目的語＋how（など）to 不定詞 e [主語＋動詞＋目的語＋補語] のうち、(a)主語＋動詞＋目的語＋名詞／形容詞 f その他 (a) There ＋ be 動詞＋～、(b) It ＋ be 動詞＋～（＋for～）＋to 不定詞、(c)主語＋tell, want など＋目的語＋to 不定詞 ㍿ 代名詞 a 人称、指示、疑問、数量を表すもの、b 関係代名詞のうち、主格の that, which, who 及び目的格の that, which の制限的用法 ㍿ 動詞の時制など：現在形、過去形、現在進行形、過去進行形、現在完了形及び助動詞などを用いた未来表現 ㍿ 形容詞及び副詞の比較変化 ㍿ to 不定詞 ㍿ 動名詞 ㍿ 現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法 ㍿ 受け身	㍿ 文 a 重文、複文 b 疑問文のうち、助動詞（may, will など）で始まるものや or を含むもの、疑問詞（which, whose）で始まるもの c 感嘆文のうち基本的なもの ㍿ 文構造 a [主語＋動詞＋補語] のうち、主語＋be 動詞以外の動詞＋名詞／形容詞 b [主語＋動詞＋目的語] のうち、(a)主語＋動詞＋動名詞／to 不定詞／how（など）to 不定詞、(b)主語＋動詞＋that で始まる節／what などで始まる節 c [主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語] のうち、(a)主語＋動詞＋間接目的語＋名詞／代名詞、(b)主語＋動詞＋間接目的語＋how（など）to 不定詞、(c)主語＋動詞＋間接目的語＋that で始まる節／what などで始まる節 d [主語＋動詞＋目的語＋補語] のうち、(a)主語＋動詞＋目的語＋名詞／形容詞、(b)主語＋動詞＋目的語＋原形不定詞 e その他 (a) There ＋ be 動詞＋～、(b) It ＋ be 動詞＋～（＋for～）＋to 不定詞、(c)主語＋tell, want など＋目的語＋to 不定詞、(d)主語＋be 動詞＋形容詞＋that で始まる節 ㍿ 文法事項 a 代名詞 (a)人称や指示、疑問、数量を表すもの、(b)関係代名詞のうち、主格の that, which, who、目的格の that, which の制限的用法 b 接続詞 c 助動詞 d 前置詞 e 動詞の時制及び相など：現在形や過去形、現在進行形、過去進行形、現在完了形、現在完了進行形、助動詞などを用いた未来表現 f 形容詞や副詞を用いた比較表現 g to 不定詞 h 動名詞 i 現在分詞や過去分詞の形容詞としての用法 j 受け身 k 仮定法のうち基本的なもの
高等学校	㍿ 不定詞の用法 ㍿ 関係代名詞の用法 ㍿ 関係副詞の用法 ㍿ 助動詞の用法 ㍿ 代名詞のうち、it が名詞用法の句及び節を指すもの ㍿ 動詞の時制など ㍿ 仮定法 ㍿ 分詞構文	a 不定詞の用法 b 関係代名詞の用法 c 関係副詞の用法 d 接続詞の用法 e 助動詞の用法 f 前置詞の用法 g 動詞の時制及び相など h 仮定法

大修館書店・マクミランランゲージハウス共催セミナー 「英語の発信力を高めるライティング・文法指導実践講座」レポート

編集部

さる2018年12月2日に大修館書店・マクミランランゲージハウス共催セミナー「英語の発信力を高めるライティング・文法指導実践講座」を開催いたしました。本セミナーは主に高校の英語の先生向けに、「生徒の英語発信力を高めるために効果的な指導を行うにはどうすればよいか」といった悩みを解決するために、2人の講師をお迎えして行われた実践的なセミナーです。

第1部の講師には京都大学の笹尾洋介先生をお迎えして「京都大学の英語教育——英語ライティング授業に焦点を当てて」と題した講演を行っていただきました。京都大学における英語教育カリキュラム改革の概要に始まり、授業や課題設定について、ご紹介いただきました。また、後半では英語産出能力を高めるための「意味順」に基づいた英語指導についてご紹介いただきました。

笹尾先生は「発信の観点から言えば、『だれが、どこで、なにをした』といった語の順番を間違えないことが大切です。語法的に間違っていたとしても、意味が通じるように指導するとよいでしょう。例えば、『もし雨が降ったら、明日の遠足は中止だ。』という文を英語で発話させる際に、『雨が降る』はrainという動詞で表せるけれど実際には『If it rains』と誤る学習者が多い。でも意

味は通じるし、『If rainsy』という誤りであっても意味は通じる。上級学習者にはさらに正確性を高めるための指導をする必要があると思いますが、まずは意味が通じるように発話させてみるとよいでしょう」と語られました。

参加者からは「ライティングなどの際に語順でつまづく生徒が多いので、『意味順』の解説がとても参考になった」といったお声が寄せられました。

第2部では立命館大学の山岡憲史先生をお迎えし「4技能の基礎となる文法力を培う『ジニアス総合英語』の活用法」と題した講演を行っていただきました。新学習指導要領で求められる諸観点をご紹介いただきながら、これから必要な文法力の養成について、具体例に即して解説していただきました。後半では『ジニアス総合英語』を用いた指導実践例をご紹介いただきました。会場の参加者と共にワークショップ形式で行い、クイズや意見交換など、活発なやり取りが行われました。

山岡先生は「例えば生徒が英文を書いたときにwhoとwhichとthatといった関係代名詞の使用を間違えたとしても、いちいち目くらを立てたりしない。形式の正確性は英語の使用と共に習得されていくと考え、まずは文法の持っている働き・機能(function)、使い方(usage)、どんな場面・状況で使われるか(context)、そうしたことを指導するのが教師の役割だと思います。それによって生徒が文法について気がつき、理解をし、興味を持てば、『ジニアス総合英語』のような参考書を自ら読んでいくのではないのでしょうか。是非、文法指導の際には形式主義に陥らない



笹尾洋介先生

ようにしていただきたい」と語られました。

参加者からは「文法項目をただ教えていくのではなく、文脈を意識して指導することの大切さがよくわかった」「(山岡先生が具体例として解説された)関係代名詞の説明の仕方を明日からの授業で使ってみたい」といったお声が寄せられました。

会場ではマクミラン社の教材や小社の書籍の展示も行われ、セミナー終了後の懇談会でも、お二人の講師への質問が相次ぐなど、盛会のうちに終了いたしました。

アンケートでは参加者の多くからセミナーにつ

いて「満足いく内容だった」とご回答いただきました。今後も英語指導に役立つ内容のセミナーを各地で開催してまいりたいと思います。



山岡憲史先生

◆セミナーに参加して

20年以上高校で教えてきたが、高校の現場を離れて4年近い。その間にさまざまな参考書・教材が新たに発刊されたが、営業の方からそれらの特徴を耳にする機会がほぼ皆無となった。

11月のある日、定期購読している『英語教育』を読んでいると、見知った写真付きのセミナーの案内が目に入った。

このセミナー、笹尾洋介先生が京都大学のライティング授業を紹介されることから、「意味順」について話を聞けるのではということ、山岡憲史先生とは旧交を温められればということを目的に、他社との共催セミナーとは珍しいなと思いながら、申し込んだ。

いわゆるアクティブラーニングが話題となっている現在、講師からの話だけではなく、隣や前後の参加者間で意見・情報の交換をしながら進められ、私にとっては収穫大のセミナーとなった。

以下の4点が収穫として挙げられる。

①大修館・マクミランの書籍・教材をまとめて手にすることができた：書籍・教材を直接手にし、その中身を覗くことはなかなかできない。ありがたい機会であった。

②前に座った先生とのペアワークで高校の現況に

ふれられた：日曜日の午後開催のセミナーに参加されるだけあって、ペアワーク相手の女性の先生からは意欲的な取り組みの話が聞けた。私からは、それに見合うだけの情報が提供できず、申し訳なかった。

③「意味順」について話を聞けた：中学1年生相手に授業を行う毎日。口頭では言えることでも、定期テスト等で「書く」となると、「どの順番に単語を書いたらいいのか、わからない」という声が教室のあちこちであがっていた。本セミナー後、「意味順」を意識させたところ、生徒たちの頭はかなり整理されたようであり、「書きやすくなった」「言う時も前よりは迷わなくなった」と直接私に言いに来た生徒もいる。

④『ジーニアス総合英語』編者の思いを直接聞けた：解説を『ジーニアス総合英語』に求めた多くの指導例とともに、その特長を編集主幹の1人である山岡先生から聞くことができた。書き手・作りの意図や思いを直接聞ける機会は実に貴重であった。

本セミナー以降、『ジーニアス総合英語』に掲載されている100のコラムを、無理せず1日1つ読むことを自らに課している。

福水勝利（ふくみず かつとし・千葉県）

英語リスニング指導 ハンドブック

鈴木寿一、門田修平 編著

A5判・402頁・
本体2,900円＋税

〔評者〕

泉 恵美子



リスニング指導について見直し、 理論と実践から学べる一冊

センター試験にリスニングが導入されて久しい。大学入試も4技能型が導入されるようになり、英語力の向上が益々求められる。しかし、リスニングについては長らくテストがあって指導がなしと批判されることも多かった。そのような中、不適切なリスニング指導がなされていることに危機感を抱いた編者と、優れた授業実践を積む教員・研究者により、素晴らしい書籍が生み出された。

学習者のリスニング力を効果的に伸ばすための指導法、リスニング力をもとに、リーディング・スピーキング・ライティング力を伸ばすための指導法を、具体的な実践事例とその基盤となる研究や理論を通して学べる良書である。

本書は、400頁余からなるハンドブックであり、リスニング指導について俯瞰的かつ詳細に知ることができる。導入編、実践編、理論編から構成され、導入編では、リスニングの重要性と必要な能力が示されたのち、「リスニング指導自己診断テスト」で各自が授業や指導を振り返ることができる。その後の「リスニング指導Q&A」では、50の質問に対する回答が書かれている。日々の授業

での疑問を解決するヒントが満載で、大いに役立ちそうである。

実践編は11章からなり、音声知覚の指導、小中高における語彙や文法を習得させるための指導や、技能統合型の指導、検定教科書やそれ以外の教材を用いた指導例などが収録されている。個人的には「リスニング力の測定と評価」が興味深く、無料の音声編集ソフトを用いた「リスニング教材編集法」が有難かった。教員が各自の校種や児童生徒を念頭に置いて読めば、より良い指導のイメージが沸き、授業改善につながるはずだ。

理論編では、リスニングの科学としてそのメカニズムやワーキング・メモリー、リズム・イントネーションなどが取り上げられ、さらに英語習得をささえるフォーミュラについて述べられている。最後にリスニングに関する実証研究の成果、並びに教室での指導への活用法も示されている。

本書の紙面からは、教員や学習者に対する執筆者の優しくかつ厳しいまなざしと溢れる思いが伝わってくる。英語教育に関わっている教員や学生・院生はもとより、英語リスニング力を向上させたいと思っている読者にもお薦めである。是非手元に置いて、まずは自己診断テストから始めたい。あるいは、関心や必要があるテーマから読み始めても良い。相互参照が充実しており、そこから発展させることが可能である。本書を通して英語リスニングの世界に浸り、その謎と面白さ、リスニング力を育成する確かな指導法を知り、明日からの授業に活用したいものである。

(いずみ えみこ・京都教育大学教授)

議論学への招待

建設的なコミュニケーション
のために

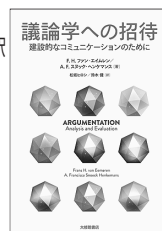
F.H. ファン・エイムレン, A.F. スヌック・
ヘンケマンス 著

松坂ヒロシ, 鈴木健 訳

A5判・256頁・
本体2,700円＋税

〔評者〕

宮川純一



議論を学ぶ「初めての教科書」

「議論」のスキルを我々は一体どこで学んだらう。本を読み、TVの知識人の発言をまね、実際に同僚、上司と議論する中で、経験的に身に付けていったのではなかろうか。

では、我々の生徒たちは？ このスキルをますます駆使して、グローバルな世を渡っていかねばならないはずだ。スピーチやプレゼンテーションの能力向上も、議論のスキル向上も、教育に求められている。個人や集団だけでなく、国益や地球レベルで影響しかねない。友好や発展のため、またサバイバルツールとして。

「コミュニケーションの危機管理ができなければ、外国語がうまく使えることにはならない」(記者)——なるほどと思う。

「論理・表現」という科目が今、形を成そうとしている。これまでの経験のなかで非効率的に身に付けたスキルから、体系的に合理的手順で展開され習得されるスキルに。英語教員は「Communication」を教えることの意義を今一度立ち止まり深める必要がある。

議論やディベートは、もはやチャレンジではなく、むしろチャレンジを後押しするサポートであると再認識をさせられることにも

なるのではないか。

1～4章では、議論の立脚点、前提を明らかにする視点が養われる。5章では、論構造を図式化し並立型、連携型、重層型の分類を通し構造分析をし、6章ではさらに論構造式（その反論の式を含む）が示され、徴候、類似、因果の例示を通し論理自体を理解する。7、8章ではルール違反（誤謬）の10パターンで、歪んだ議論を見抜く力を付ける。9、10章で戦略的立ち回り方として効果的に論陣を張る手法を学ぶ。各ポイントに漏れなく例文、例題が付き、納得しながら読み進めることができる「伝統的なタイプではない」「初めての教科書」（著者）である。

各章末にある、訳者の松坂、鈴木両先生のコラム「ディベート的思考方」「ディベートの実践」が充実している。反論の余地のない状況打開に「議論を突き詰める」「矛盾」「比喩」はすぐ明日の会議でも役に立つ。「リサーチをする」では「知識を先に調べて、情報を後から調べる」「資料には5つのタイプがある」が大変参考になった。

本編の訳には、「うまく日本語が対応しないケースが多かった」とご苦労があったようだ。福沢諭吉が「議論」という言葉を初めて当てた時のような、そんな文化が開けていく気運を感じる。「口論や喧嘩ではなく、冷静な議論に強い人々が大勢出てくださることを期待しております」との訳者の願いに、時代が追い付いたための「初めての教科書」となることを、私も期待している。

（みやがわ じゅんいち・
岐阜聖徳学園高等学校教諭）

英語の歴史から考える 英文法の「なぜ」

朝尾幸次郎 著

四六判・286頁・
本体1,800円＋税

〔評者〕

滝沢直宏



現代英語をより良く具体的に理解 するための英語史

英語の教員が知識としてもっておくべき領域は多岐にわたるが、中でも英文法、英語史、調音音声学はその中核を占めると言えるだろう。本書は「文法」の「歴史」を取り上げた本であり、英語教員にとって不可欠な内容で満ちている。

本書の各章で扱われている事項は、高校までに習うものがほとんどであり、本書で取り上げられている事項を知識としてもっていれば、生徒が抱く「なぜ」の疑問に適切に答えられるようになる。

実際、中学で習う英語は「なぜ」の連続である。評者自身が英語を習った経験でも、「不定冠詞 an の n は何か」、「なぜ have to は義務を表すのか」など不思議なことが多かった。これらに答えが得られたのは、大学で英語史の授業を受けた時である。様々な制約があるので致し方ないが、高校までに知る機会があったら英文法をより体系的に理解できただろうに、と感じたものだ。著者は「現代英語の文法は過去の英語の歴史の積み重ねの上に成立したものです」と述べているが、だからこそ歴史が重要ということになる。

項目は多岐にわたるが、例えば

always の-s は何か、what は綴りとしては wh なのに [hw-] と発音するのがなぜか、says は [seiz] ではなく [sez] と発音されるのはなぜかなど、素朴な問題が多く取り上げられている。こうした疑問に答えられれば、学習者の知的好奇心、さらには言葉の仕組みや母語に対する関心も深まるだろう。

本書は、興味深い実例が満載されている。「聖書」から多くの例が取り上げられているが、さまざまな時代の版があって内容が同一なのだから英語の歴史を辿るには聖書は適切な素材だ。しかし、本書は、普通の小説や映画などからも例文を多数引いている。無味乾燥になりがちな文法やその歴史の話が実に楽しく読めるという点は、本書の著しい特徴と言って良い。

本書で扱われているのは、狭義の文法だけではない。学習者を悩ませる綴り字の問題も歴史的観点から音声変化と絡めて扱われている。「英語の発音と綴り字の関係は不規則だとよく言われます。しかし、それは規則的に不規則なのです」という述べ方は妙に心に響いた。

章末の英語史に関わる「こぼれ話」も興味深い。評者も、授業の際に紹介したいものばかりである。

本書は、現代英語が過去を引き継いで成立したものであるということが具体例によって理解することができ、それによって現代英語についての理解を深めるのに有益な書籍である。

（たきざわ なおひろ・
立命館大学大学院教授）

大修館書店の本

◆2020年度からの新学習指導要領に対応した最新版テキスト
新学習指導要領にもとづく英語科教育法 第3版
望月昭彦＝編著 久保田章・磐崎弘貞・卯城祐司＝著
(A5判・328頁・本体2,300円＋税)

◆コアカリキュラム対応。新しい時代の英語教師のために
「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法
酒井英樹・廣森友人・吉田達弘＝編著
(A5判・336頁・本体2,400円＋税)

◆日本語教師が和文英訳のポイントを徹底解説
英語教師が知っておきたい日本語のしくみ
——英文法・英作文指導に活かす
高嶋幸太＝著
(四六判・208頁・本体1,700円＋税)

◆「陰謀論」で読み解く異色のアメリカ文学論
パラノイドの帝国——アメリカ文学精神史講義
巽孝之＝著
(四六判・258頁・本体2,200円＋税)

◆スタイルがわかれば、英語がわかる
はじめての英語文体論——英語の流儀を学ぶ
堀正広＝著
(A5判・272頁・本体2,200円＋税)

○

お知らせ

○

小社英語教科書についての質問、ご感想などを小社編集部に宛ててお寄せください。「G.C.D.教科書 Question Box」で随時ご紹介・ご回答してまいります。

また、小社教科書を使った授業の紹介などのご投稿（郵送のみ）をお待ちしております。（採否のご連絡は致しておりません。また、原稿はお返ししません。）

なお、小社ホームページには小社教科書の内容をご案内しているサイトがございます。ここでは、英語の先生方に役立つ様々な情報も提供しております。

<https://www.taishukan.co.jp/eigo/>

営業便り

▶「まいどありがとうございます！」元々は関西出身である私が福岡支店に勤務して早十数年。高校時代は英語が大変苦手な生徒だったのですが、九州各地の先生方の温かさに支えられ、また日々学校現場の先生方との触れ合いを楽しみに仕事をさせて頂いております。▶さて本年度は30年続いたセンター試験の最後の年になり、大学入試も大きな変化が予定されております。学習指導要領の大きな改訂も目前。各教科の先生方の中でも特に大きな変化に対応していかななくてはならない英語科の先生方のご苦労は大変な事と推察致します。微力ではありますが小社教科書、副教材、辞書、各種情報のご提供等で何らかのサポートをさせて頂ける様、今後も明るく楽しく先生方のお席までお伺いさせて頂ければ嬉しく思います。▶約30年前と言いますと、長年ご愛顧頂き先生方に育てて頂いた小社『ジーニアス英和辞典』が生まれた頃。昨年その子供（文法書版）『ジーニアス総合英語』が誕生致しました。『ジーニアス英和辞典』同様、大きく育てて頂ければ願っております。今後ともご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。（福岡支店 出口博之）



編集後記

▶今号では「これからの高校英語教育の変化を読み取る」と題して学習指導要領の改訂や大学入試改革で、特に高等学校の英語教育がどう変わるか（または変わらないか）を特集しました。先生方にこれらの変化を概観していただく一助となればと考えております。▶今後のスケジュールについては、先生方は既にご存知と思われます。ですが、小学校での教科としての英語の開始や民間団体による資格・検定試験の利用など、英語教育関連で様々な話題が活発に議論される中、時に改めて確認される場合もあるかと思われます。そのような際は、今号の特に3ページの2020年度の試験関連スケジュールや、18-19ページの新学習指導要領の見取り図をご利用いただければと考えております。また、これらの変化に向けての現時点での先生方の取り組みもご紹介いたしました。今号が先生方の活発な意見交換の一助になれば幸いです。（葉）

Genius・Compass・Departure 英語通信

第63号
2019年4月20日発行
(年2回発行)

編集人：「G.C.D. 英語通信」編集部

発行人：鈴木一行

発行所：株式会社 大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

電話 (03) 3868-2293(編集部) / (03) 3868-2651(販売部)

【出版情報URL】 <https://www.taishukan.co.jp> 【振替】 00190-7-40504

印刷・製本：文唱堂印刷株式会社

〔本誌のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。本誌を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。〕